

純粹理性の二律背反

林 昌 道

The Antinomy of Pure Reason

Masamichi Hayashi

この小論は、純粹理性の二律背反が如何なる仕方
で成立したとされているか、また如何なる仕方
でその解決が図られているか、を問題としたものである。

1. 純粹理性の二律背反

カントによれば、「我々の凡ての認識は感官から始まり、そこから悟性に進み、理性で終る」(A298=B355)。最高の認識能力たる理性に関して論理的使用と実在的使用が存する。理性はその論理的使用において認識の凡ての内容を捨象する。理性はその実在的使用においては、感官からも悟性からも借りて来ていない或る概念と原則との根源を包蔵している。理性の論理的使用と実在の使用の区別に対応するのが理性の論理的能力と先験的能力の区別である。カントは理性の論理的能力と先験的能力を次のように連関せしめる。「理性推理における理性の形式的論理的手続は、純粹理性による総合的認識における理性の先験の原理が如何なる根拠に基づくのであろうかということに関して既に十分なる手引を我々に与えている。第一に理性推理は（悟性とその範疇を以ての如く）直観を規則の下へもたらさんがために直観に向かうのではなく、却って概念及び判断に向かう。したがって純粹理性が対象に関係するにしても対象及びその直観には何ら直接の連関を有するものではなく、ただ悟性とその判断に直接の連関を有するものである。……第二に理性はその論理的使用においてその判断（断案）の普遍的制約を求める。そして理性推理は自らの制約を普遍的規則（大前提）の下に包摂することによる、それ自身一つの判断に他ならない。さてこの規則もまた理性のまさに同じ試みを受けるが故に、そしてこれによって制約の制約が（前推理によって）できる限り探求されなければならぬが故に、（論理的使用における）理性一般の固有の原則は次のものとなることはひとの十分看取するところである。即ち悟性の制約せられた認識に対して無制約者を

見出し、以て悟性認識の統一を完成する、というものである。この論理的格率も、被制約者が与えられている場合、次々と従属していつている制約の全系列（これはそれ自身無制約的である）も与えられている、と想定するということによらなければ純粹理性の原理となることはできない」(A306—8=B363—4)。「純粹理性の斯くの如き原則は明らかに総合的である。なぜならば被制約的なものは確かに分析的にその制約に関係するけれども無制約的なものには関係しないからである」(A308=B364)。ここには純粹理性の原理が「被制約者が与えられている場合、次々と従属していつている制約の全系列（これはそれ自身無制約的である）も与えられている」というものであることが示されている。カントは次のように問う。「（現象の総合における、或いはまた物一般の思惟の総合における）制約の系列が無制約者にまで及ぶという件の原則は客観的正当性を有するののかそれとも否か。……或いは寧ろ客観的に妥当なるそのような理性命題はどこにも存在せず、よりいっそう高次の制約への上昇において制約の完全性に近づき以て我々に可能な最高の理性統一を我々の認識の中にもたらすようにという単に論理的な指図が存するのみであらうか」(A308—9=B365)。しかるに上述の指図が誤解されて「制約の系列のそのような無制限の完全性を性急にも対象そのもののうちに要請する」純粹理性の先験の原則とされたのか。斯かる問題を扱うのが先験的弁証論であるとカントはいう(A309=B366)。

カントは、判断の形式から範疇を導出したのに倣って理性推理の形式から純粹理性概念を導出せんとした(Vgl. A321=B378)。カントによれば、<カーユスは可死的なり>という判断の述語がその下で与えられる制約を含む概念（この場合は人間という概念）を我々は求め、この概念をその全範疇において考えられた制約の下に包摂した後に（<凡ての人間は可死的な

り>), 我々は我々の対象の認識を規定する(<カーユスは可死的なり>)。カントによれば, 我々は犬前提において, その全範囲において考えられた或る制約の下で述語を思惟した後で, 理性推理の断案において述語を或る対象へと制限する。制約の全範囲ということに直観の総合において対応するのは制約の総体性である。先験的理性概念は与えられた被制約者に対する制約の総体性の概念に他ならない。無制約者のみが制約の総体性を可能ならしめ, そしてひるがえって制約の総体性が常にそれ自身無制約的であるが故に, 純粋理性概念一般は被制約者の総合の根拠を含む限りにおける無制約者の概念によって説明され得る」(A322=B379)。カントは斯かる無制約者の概念としての先験的理性概念を理性推理の形式から導出するが, この点は次のように述べられている。「理性は単に定言的理性推理に用いるまさに同一の機能の総合的使用によって必然的に思惟の主観の絶対的統一の概念に至らねばならない。仮言的理性推理における論理的手続は与えられた制約の一つの系列における絶対的無制約者の理念を必然的に伴わねばならない。最後に選言的理性推理の単なる形式はあらゆる存在体の存在体という最高の理性概念を必然的に伴わねばならない」(A335-6=B392-3, Erdmannに従い in *hypothetischen Vernunftschlüssen die Idee vom* と読む)。斯くして心, 世界及び神の三つの先験的理性概念(或いは理念)が見出された。カントは三つの先験的理念に応じて三種の弁証的推理を見出した。

カントは世界概念について次のようにいう。「現象の総合における絶対的総体性(Totalität)に関する限りにおけるあらゆる先験的理念を私は世界概念と名づける。それは一方において, 理念であるにすぎない世界全体(Weltganzen)の概念も基づくところのまさにこの無制約的総体性のためであり, 他方においてその先験的理念が単に現象の総合に, したがって経験的総合に向かうからである。これに対してあらゆる可能的な物一般の制約の総合における絶対的総体性は純粋理性の理想(これは世界概念から完全に区別されている)を生じさせるであろう」(A407-8=B434-5)。

カントは四つの宇宙論的理念をかかげる。カントは次のように考えたのである。純粋先験的概念は悟性からのみ発現し得る。理性は元来如何なる概念をも産出せず, ただ悟性概念を経験的なものの限界を越えて拡張しようと努めるが, しかし経験的なものの結び付きにおいてである。経験的なものの結び付きにおいて経験的なものの限界を越えるということは, 理性が

与えられた被制約者に対し制約の側において絶対的総体性を要求し範疇を先験的理念となすことによりなされる。理性が与えられた被制約者に対し制約の側において絶対的総体性を要求するのは, 経験においては見出されずただ理念のうちのみに見出される無制約者にまで経験的総合を続けることにより経験的総合に絶対的完全性を与えるという目的のためである。目的とされるこのことを理性が要求するに際し, 理性は次の原則に従う。「被制約者が与えられている場合, それによってのみ被制約者が可能であったところの制約の総数(ganze Summe)も, したがって端的に無制約的なものも与えられている」(A409=B436)。

カントは, 先験的理念が「無制約者にまで拡張された範疇」に他ならないとし(A409=B436), 先験的理念が「範疇の項目にならって順序づけられた一つの表にもたらされる」という(a. a. O.)。しかし先験的理念の表の作成のために凡ての範疇が役立つわけではなく, 「その範疇において総合が系列をなすところの, 詳しく言うところ総合が被制約者に対する次々と従属せしめられる(並列せざる)制約の系列をなすところの範疇」のみが役立つのである(a. a. O.)。「絶対的総体性が理性によって要求されるのは, 絶対的総体性が所与の被制約者に対する制約の上昇の系列に関する限りにおいてだけである」(A409-10=B436)。

カントが範疇の表をもとにして作った宇宙論的理念は次の如くである。

「1. あらゆる現象の与えられた全体の合成の絶対的完全性

2. 現象における与えられた全体の分割の絶対的完全性

3. 現象一般の生起(Entstehung)の絶対的完全性

4. 現象における可変的なものの現存在の依存性の絶対的完全性」(A415=B443)

カントはここで重要な注意を与えている。それは2項から成る。「ここで第一に注意されなければならぬことは, 絶対的総体性の理念が関わるのはただ現象の解明であって, 物一般の全体の純粋悟性概念ではないということである。斯くしてここでは現象は与えられたものと看做される。そして理性は, 現象の可能性の制約が系列をなす限り, その制約の絶対的完全性を要求する。したがって理性は, 現象がそれにより悟性法則に従って解明され得るという端的に(あらゆる点で)完全な総合を要求する。第二に理性が制約のこの, 系列をなし而も背進的に続けられる総合において探し求

めるのは本来無制約者のみである。いわば相合してそれ以上なら他の前提を予想せぬところの前提の系列における完全性のみである。さてこの無制約者は常に系列の絶対的総体性のうちに……含まれている。しかしこの端的に完成された総合は再びまた理念であるにすぎぬ。というのは現象においてもそのようなものが可能であるかをひとは少なくとも前以て知り得ぬから。……現象における多様の背進的総合（現象を或る与えられた被制約者に対する制約の系列として表象する範疇を手引とする）の絶対的総体性のうちに無制約者が必然的に含まれているが故に（この総体性が果して実現され得るか、また如何にして実現され得るかという問題は未決定にしておくとしても）、理性はここでは総体性の理念から出発するという途をとる」（A416—7=B443—5）。

この無制約者は、カントによれば、「単に全系列（その凡ての項は例外なく制約されていてその項の全体のみが端的に無制約的である）のうちに成立する」と考えられるか、それとも「系列の他の項がそれに従属するがそれ自身は如何なる他の制約の下にも立たぬところの系列の部分」であると考えられるかである（A417=B445）。第一の場合、系列は「先立つ側において」限界を有さず無限的である。そこにおける背進は決して完成されていない。第二の場合、系列の第一項が存在する。それは「経過せる時間に関しては世界の始め、空間に関しては世界の限界、その限界のうちに与えられた全体の部分に関しては単純者、原因に関しては絶対的自己活動（自由）、可変的なものの現存在に関しては絶対的必然性と称する」（A418=B446）。

カントは純粹理性の二律背反ということについて次のような説明を与えている。「我々が我々の理性を単に悟性原則使用のために経験の対象に対して使うだけでなく、悟性原則を経験の限界を超えて拡張しようと敢えてするならば、経験における確証を希望することも許されないが経験における反駁をおそれる必要もない詭弁的命題が生ずる。これらの命題の各々はそれ自体において矛盾がないだけでなく理性の本性のうちにその命題の必然性の制約さえも見出すのであるが、ただ不幸にして反対が同様に妥当で必然的な主張根拠を自己の側に有するのである」（A421=B448—9）。純粹理性はここにおいて二律背反に陥っている、とカントはいうのである（Vgl. A421=B449）。カントは四つの二律背反を提示している。無制約者の二つの捉え方に応じて定立の命題と反定立の命題が成り立つとカントは

いう。定立は無制約者を以て系列の第一項と解するものであり、反定立は無制約者を以て「単に全系列のうちに成立する」と解するものである。

カントは純粹理性の二律背反が弁証的推理に基づくと述べている。「純粹理性の全二律背反は弁証的論証に基づく。即ち被制約者が与えられているなら、そのあらゆる制約の全系列も与えられている。さて感官の対象は被制約的なものとして我々に与えられている。したがって云々〔感官の対象のあらゆる制約の全系列も与えられている〕」（A497=B525）。

2. 純粹理性の二律背反のカントによる解決

カントは二律背反が弁証的推理に基づくと看做し、この推理の大前提に登場する無制約者の二つの捉え方に応じて定立と反定立の両命題が成立すると考えている。さてこの推理の大前提は常に成り立つ命題であろうか。カントはこれに対して否定的に答える。したがってこの推理によって正しい結論を得ることはできないのである。カントは次の命題なら常に成り立つと考える。即ち「被制約者が与えられているなら、まさにそのことにより被制約者のあらゆる制約の系列における遡源が我々に課せられている」という命題である（Vgl. A497—8=B526）。この命題は、カントによれば、分析的命題である（A498=B526）。したがって「感官の対象が被制約的なものとして与えられている」場合、我々はそれの「あらゆる制約の系列における遡源が我々に課せられている」ということができるが、感官の対象たる被制約者の制約の全系列が与えられているということができかどうかは問題なのである。

宇宙論的推論の大前提として掲げられているのは、「被制約者が与えられているならそのあらゆる制約の全系列も与えられている」という命題であった。カントはこの命題が物自体に関わる命題であるならこの命題は成り立つという。カントはこの点について次のように述べている。「被制約者並びにその制約が物自体である場合、被制約者が与えられているなら単に制約への背進が課せられているだけでなく、制約は被制約者が与えられていることによって現実に既に一緒に与えられている。そしてこのことは系列の凡ての項にあてはまるが故に、制約の完全なる系列、したがってまた無制約者も、唯、件の系列によってのみ可能であった被制約者が与えられていることによって、同時に与えられている或いは寧ろ前提されている」（A498=B526）。斯くして「被制約者が与えられているならそのあらゆる制約の全系列も与えられている」という命

題の場合、被制約者及びその制約は物自体であるといえよう。

宇宙論的推論の小前提は、感官の対象が被制約的なものとして与えられている、という命題である。この宇宙論的推論においては、大前提と小前提とで被制約者は異なる意義を有することになる。したがってここに誤謬推理が存することになる。カントはこの点について次のように述べている。「宇宙論的推論の大前提においては被制約者は純粹範疇の先験的意味に、小前提においては被制約者は単なる現象に適用された悟性概念の経験的意味に解されている」(A499=B527)。このことばの意味は次の文に詳しく説明されている。「(大前提における)被制約者とその制約との総合並びにそれらの制約の全系列は時間による制限を何ら伴わず継起の如何なる概念も伴わない。これに対して(小前提に包摂される)経験的総合並びに現象における制約の系列は必然的に継時的にそして時間においてのみ次々と与えられている。したがって私は総合とそれにより表象された系列との絶対的総体性を大前提において前提することができたのと同じようには小前提において前提することができなかった。というのは大前提においては系列のあらゆる項がそれ自体において(時間の制約なしに)与えられてるが、小前提においては系列のあらゆる項は継時的遡源(これが与えられてあるのはその現実的遂行によるのみである)によってのみ可能であるから」(A500-1=B528-9)。

カントの上の説明によると、二律背反は誤謬推理によって生じたのである。二律背反の解決は、我々が誤謬推理に陥らぬようにすることによって可能となる。宇宙論的推論において、「被制約者が与えられているなら、まさにそのことにより被制約者のあらゆる制約の系列における遡源が我々に課せられている」という命題を大前提として出発するなら、我々は誤謬推理に陥らぬであろう。カントによる二律背反の解決の方法は上述の如くであるはずである。しかし果してそのような仕方の解決が四つの二律背反の凡てについてなされているであろうか。カントによる二律背反の解決を少し詳しくみることにしよう。

i) 第一の二律背反の解決

カントは第一の二律背反の場合を取り上げている。カントはここで二つの命題を区別している。即ち「世界は空間に関して無限(unendlich)であるかまたは無限でない(non est infinitus)かである」という命題—— S_1 とする——と「世界は無限であるか有限(非無限 nichtunendlich)であるかである」という命題

—— S_2 とする——を区別している。 S_1 の場合、「無限」と「無限でない」は形式的矛盾概念の関係にある。「世界は無限である」が虚偽なら、「世界は無限でない」は真理でなければならない。この場合、有限の世界を定立することなしに無限の世界をひとは廃棄するであろう。カントは S_1 の場合を以後論議の対象としていない。カントは S_2 の場合を論じている。カントは世界が物自体として与えられていることを否認する。カントによれば、「世界が物自体としては全然与えられていない場合、したがって世界がまたその量に関して無限的として或いは有限的として与えられていない場合」には「世界をそれ自体においてその量に関して規定されたものと看做す」ことは虚偽であり得る(A504=B532)。「世界は無限であるか有限であるかである」という S_2 の場合、「世界は無限である」も「世界は有限である」も虚偽であり得るだろうとカントはいう。カントはこのことを次の例を以て証明している。「あらゆる物体はいい匂いがする」(Ein jeder Körper riecht gut.)と「あらゆる物体はいい匂いがしない」(Ein jeder Körper riecht nicht gut.)という二つの命題の他に「あらゆる物体は匂わない」(Ein jeder Körper riecht gar nicht.)という第三の命題が可能である、という。この第三の命題が可能であるように「世界は無限である」(Die Welt ist unendlich.)と「世界は有限である」(Die Welt ist endlich<nicht unendlich>.)の他に「世界は無限とも有限ともいえない」(Vgl. A520=B548)という第三の命題が可能である。

カントは S_2 における反対(無限と有限)を弁証的反対(dialektische Entgegensetzung)と称し、これを矛盾的反対(Entgegensetzung des Widerspruchs)から区別している(A504=B532)。 S_2 において「世界は無限である」と「世界は有限である」が矛盾的反対の関係にあると看做されたとしたら、世界が物自体であると想定されている。というのは「世界の現象の系列における無限的遡源を廃棄しようとする有限的遡源を廃棄しようとする世界は残存するからである」(A504=B532)。「私がこの前提或いは仮象を除き、世界が物自体であることを拒否するならば、両主張の矛盾的反対は単に弁証的な反対に変わる」(A504-5=B532-3)。述語が互いに形式的矛盾概念の関係にある二つの命題が許容し難き前提を有しているなら、その二つの命題は共に拒否される。世界は「私の表象の背進的系列を離れて」それ自体において存するのではないから、世界はそれ自体において無限なる全体としてもそれ自体において有限なる全体としても存在しない」(A505=B533)。

「世界は現象の系列の経験的遡源においてのみ存在する」(a. a. O.)。

カントは二律背反の解決の仕方について次のように述べている。「斯くしてその宇宙論的理念における純粹理性の二律背反は、その二律背反が単に弁証的であり仮象——物自体の制約としてののみ妥当する絶対的総体性の理念を現象に適用したことにより生ずる——の矛盾であるということが示されることにより排除される」(A506=B534)。

第一の二律背反の解決に関してカントのいうところによれば、我々が経験的背進において到達する制約はそれ自身また経験的に制約されたものと看做されなければならぬ。したがって我々は制約の系列の与えられた各項から常により高い項へ経験的に進行しなければならぬ。この場合不定的背進(Rückgang in indefinitum, A524=B552)といわれてよい。というのは我々が被制約者からその制約へ遡るに際して制約は被制約者の外にあり、したがって制約は被制約者により同時に与えられてはいないで経験的背進において初めて加わって来るからである(A524=B552)。我々が経験的制約の系列においてどこまで進んでも決して絶対的限界を想定してはならぬ。我々は経験的背進の量によって初めて世界の量の概念を作らねばならぬ。ところで経験的背進によっては「現象の全体の量は決して端的に規定されていない。したがって我々はこの背進が無限に進むということもできない。というのは背進が無限に進むことは、背進がいまだ到達しない項を予料し、そしてその量(Menge)を経験的総合が到達し得ざるほど大きく表象するであろう、したがって世界の量を背進に先立って……規定するであろうが、しかしそれは不可能だからである」(A519=B547)。それ故我々は世界の量それ自体についてはなにごといいえない。

カントによれば、定立も反定立は何ごとに関しても争っているのではないこと、或る種の先験的仮象が何らの現実在も見出され得ぬところに現実在を描き出したのであることを確信させるより以外にない。こういう方法を採るのである(Vgl. A501=B529-30)。カントはこの第一の二律背反によって現象の先験的観念性が間接に証明され得るという(Vgl. 506-7=B534-5)。

ii) 第二の二律背反の解決

カントによれば、「私が直観において与えられている全体的なものを分割すれば、私は或る被制約者からその可能性の制約へ進むのである。部分の分割(細分或いは分解)はこの制約の系列における背進である。

背進が単純なる諸部分に到達し得る(könnte)なら、その場合にのみこの系列の絶対的総体性は与えられているであろう。……分割、即ち被制約者からその制約への背進は無限に進行する。なぜなら制約(部分)は被制約者自身のうちに含まれており、そしてこの被制約者はそれ自らの限界の間に入れられた直観においてすっかり与えられているが故に制約はまた悉く被制約者と共に与えられているからである」(A523-4=B551-2)。「凡ての部分は全体の直観のうちに含まれている」が「凡ての分割は全体の直観のうちに含まれていない。」凡ての分割は背進においてのみ成立するもので、背進によって初めて系列が現実的となるのである。

「この背進は無限的であるが故にその到達する一切の項(部分)は与えられた全体のうちに集合体(Aggregat)として含まれているけれども、分割の全系列は含まれていない」(A524=B552)。無限に分割され得る全体について「それが無限に多くの部分から成る」ということは許されないのである(Vgl. A524=B552)。

それでは「無限に分割可能な全体が無限に多くの部分から成る」という命題と反定立の命題は如何なる関係にあるのか。反定立の命題は「世界における複合された物は如何なる物も単純な部分から成らず、世界のうちにはどこにも単純なるものは存しない」という命題である。カントはこの反定立の命題を定立のそれと同様に偽なる命題と看做している。それではカントは如何なる理由から反定立の命題を偽と看做したのであるだろうか。私は次のように解する。カントは「無限に分割可能な全体が無限に多くの部分から成る」という命題を偽なる命題と看做した。反定立の命題に出ている「世界における複合された物」なる概念は「無限に多くの部分から成る」無限に分割可能な全体なる概念を前提していると解される。両概念は結局、背進に先立って全体の分割がなされているということを前提していることになる。両概念の前提するところの、背進に先立つ全体の分割は、カントによれば、許されないことである。第二の二律背反の反定立の命題は、背進に先立つ全体の分割なる概念を主辞概念の前提とするものであり、偽なる命題である。

このような私の解釈はカントの次の叙述によっても支持されていると思う。カントは「全体が無限に組織されている」(Das Ganze ins Unendliche gegliedert sei.)ということは全く考えられぬという(A526=B554)。物質の部分がその無限分解に際して

組織され得るということは考えられるという。というのは「空間における与えられた現象の分割の無限性は、この分割の無限性によってのみ分割可能性、即ち諸部分のそれ自体において端的に無規定なる量(Menge)が与えられているということ、しかし部分自体は細分によってのみ与えられ規定されるということ、要するに全体はそれ自体において既に分割されているのではないということに基づくのである」から(A526=B554)。カントのこの叙述は、「世界における複合された物」という概念を以て「それ自体において既に分割されている」全体という概念を前提するものと看做している、と解される。

iii) 第三の二律背反の解決

カントは第三及び第四の二律背反の解決を叙述するに際し、第三及び第四の二律背反が第一及び第二の二律背反と異なる特性を有することを先ず指摘する。カントによれば、第一及び第二の二律背反は数学的二律背反ともよばれるものであり、その定立及び反定立の命題において「常に一つの系列があって、それにおいては制約と被制約者とが系列の項として連結せられ、それによって同種のものであった。背進は決して完成されたものとは考えられず、もし完成されたものと考えられるとしたら、それ自身被制約的な項が誤って第一項として、したがって無制約的として想定されなければならぬであろう」(A528=B556)。これに対して第三及び第四の二律背反は力学的二律背反ともよばれている。「ここでは感性的制約の力学的系列は、系列の一部ではなくして単に知的(intelligibel)として系列の外に存する異種の制約をなお許容する」(A530=B558)。

カントによれば、数学的二律背反の定立と反定立は共に虚偽の前提を基礎とするものであり排斥されなければならないものであったが、力学的二律背反の場合、定立と反定立は共に真たり得るとされた。カントによれば、「力学的系列の汎通的被制約者(das Durchgängigbedingte)は現象としての力学的系列と不可分離的であるが、経験的に無制約的な非感性的なる制約と連結せられて、一方において悟性に、他方において理性に満足を与える。そして単なる現象のうちにいずれかの仕方でも無制約的総体性を探求した弁証的論証は脱落するが、これに対し件の理性命題は斯く訂正された意味において凡て両方とも真たり得る」(A531-2=B559-60)。

カントは第三及び第四の二律背反に関して以上の如き見方をした後、第三の二律背反の解決にとりかかる。カントは出来事に関して自然に従った原因性と自由か

らの原因性を考えることができるという(A532=B560)。自然に従った原因性は「感性界における、規則に従った継起のうちにある一状態と先行状態との連結である。さて現象の原因性は時間制約に基づき、そして先行状態は、もしそれが常に存したならば、時間のうちに初めて生じる如何なる結果をも惹起しなかったであろう。それ故生起または成立した事象の原因の原因性もまた成立したものであり、悟性原則に従って自らまた原因を必要とする」(A532=B560)。

カントは自由からの原因性について次のように考えている。「私が宇宙論の意味における自由ということによって意味せんとするのは、一つの状態を自らによって(von selbst)始める能力である。したがってその能力の原因性は、これを時間的に規定する他の原因の下に自然法則に従って再び従属することはない。自由はこの意味において純粋先験的理念であって、それは第一に経験から借りて来たものを何も含まない。第二にその対象はまた如何なる経験においても規定されて与えられ得ぬ。というのは凡ての出来事は原因を有さねばならぬ、したがってそれ自体生起し或いは成立した原因の原因性もまた原因を有さねばならぬというのがあらゆる経験の可能性さえもの普遍的法則であるから。実際これによって経験の全領域は、それがどこまで拡がろうとも、単なる自然の総括に変えられる。しかしそのようにしては因果関係における諸制約の絶対的総体性は引き出すべくもないから、理性は自らによって働き始め得る——因果結合の法則に従って働きへと規定する他の原因が先行することなしに——自発性という理念を作るのである」(A533=B561)。

カントによれば、自由の先験的理念の基礎の上に自由の実践的概念が成り立つのである(A533=B561)。「実践の意味における自由とは、感性の衝動による強制からの、決意性(Willkür)の独立のことである」(A534=B562)。「実践的自由は、或ることが起こらなかったにも拘らずそのことが起こるべきであったということ、そしてその現象における原因が、経験的法則に従って時間秩序のうちに規定されている何らかのことを、件の自然原因から独立に自然原因の力と影響に抗してすら産出する、したがって事象の一列を全く自らによって始める原因性が我々の決意性のうちに存しない程、規定的であったわけではないということを前提するのである」(A534=B562)。この意味においてカントは自由の実践的概念が自由の先験的理念を基礎にしなければならないというのである。

カントは自由の先験的理念と自然の必然性との関係

の問題に遭遇することになるが、この問題について次のように考えている。「不易の自然法則に従った、感性界のあらゆる事象の汎通の関連についての件の原則の正当性は、既に先験的分析論の原則として確立していて、決して毀傷せられることはない」(A536=B564)。仮に物自体と現象の区別がなされないならば、「自然はあらゆる事象の完全なる、それ自身において十分に規定的なる原因である」ことになり、自由は救われるべくもない(a. a. O.)。これに対して物自体と現象の区別がなされるならば、現象は現象ならざる根拠を有さねばならぬ。「そのような叡知的の原因は、その結果が現象でありそして他の現象によって規定され得るにも拘らず、その原因性に関しては現象によって規定されない。斯くして叡知的の原因はその原因性と共に系列の外にあるが、その結果は経験的制約の系列のうちに見出される。したがってその結果はその叡知的原因性に関しては自由と看做され得るが、現象に関しては自然必然性に従って現象から生じた結果と看做され得る」(A537=B565)。カントは上のように述べて自由と自然必然性が矛盾するものではないとする。

カントは上述の考え方に立って自由と自然必然性の関係を主観における自由と自然必然性の関係として解明せんとする。この目的のために性格(Charakter)なる概念を提出する。性格とは、作用原因が有するところの、作用原因の原因性の法則である(A539=B567)。カントは「我々は感性界の主観において第一に経験的性格を有するであろう。経験的性格によって主観の行為は現象として他の諸現象と恒常的自然法則に従って徹頭徹尾関連しているであろう、そして行為の制約としての現象から導出され得るであろう、斯くしてこれらの現象と結合して自然秩序の唯一の系列の諸項をなすであろう」(a. a. O.)と述べているが、この経験的性格に対して叡知的(intelligibel)性格を想定し、次のようにいう。「第二にひとは主観に対してなお叡知的性格を容認しなければならないであろう。この叡知的性格によって主観は確かに現象としての件の行為にとっての原因なのであるが、叡知的性格自身は感性の如何なる制約の下にも立たず、それ自身現象ではないのである」(a. a. O.)。カントはこの叡知的性格を「決して直接には知られ得ぬ」ものと看做しており、それを「経験的性格に従って思惟されねばならぬ」と捉えている(Vgl. A540=B568)。叡知的性格と経験的性格の関係は先験的対象と現象の関係の如し、とされている。

斯くしてカントによれば、「現象としてのこの主観は

その経験的性格からいえば因果結合に従った規定のあらゆる法則に従っているであろう」が(A540=B568. Erdmannに従って nach der と読む)、その同じ主観は叡知的性格からいえば「感性と現象による規定とのあらゆる影響から解放されねばならぬだろう」(A541=B569)。カントは主観における自由と自然必然性の関わりを上のように解明したのである。自由と自然必然性は同一の行為において矛盾することなく見出されることになった。

カントは自由と理性の関係について触れている。カントによれば、人間は「感性界の現象の一つであり、その限りにおいてその原因性が経験的法則にしたがわねばならぬ自然原因の一つでもある」(A546=B574)。しかし人間は「単なる統覚によっても、而も感官の印象には全く数えられ能わぬ働きと内的規定において自己自身を認識する。そして一方においてそれ自身勿論現象体(Phänomen)であるが、他方において、即ち或る能力に関しては単に叡知的なる対象である。というのは彼の働きは感性の受容性のうちには全然数えられ得ぬからである。我々はこれらの能力を悟性及び理性と名付ける。特に後者はその対象を単に理念に従って考量し、悟性を……理念に従って規定するが故にあらゆる経験的に制約された能力とは全く固有の仕方として特別に区別される」(A546—7=B574—5)。カントはこの理性が原因性を有するという(A547=B575)。カントによると、理性が行為を産出する原因である限り、行為を理性との関係において考量するならば、我々は自然秩序とは全く異なる規則と秩序を見出す(A550=B578)。「理性はその経験的性格(感官の仕方)において全く蔽密に規定され必然的であるが理性の行為は自由と称し得るのであるか」(A551=B579)。カントはこの問いに肯定的に答えている。「あらゆる行為は……自然原因の連鎖のうちに……力学的に規定されることなく自由に働く(handeln)純粹理性の叡知的性格の直接の結果である」(A553=B581)。

カントは第三の二律背反の解決の項の最後の所で、彼がここで自由の現実性を証明しようとしたのではないと述べている。カントによれば、経験から経験法則に従って思惟されてはならぬものへと推論することはできないであろうからである。カントは自由をただ先験的理念として扱うのである。

iv) 第四の二律背反の解決

カントは第三の二律背反と第四のそれとの違いについて先ず触れている。第三の二律背反では無制約の原因性が問題であったが、第四の二律背反では実体の無

制約的実存在 (Existenz) が問題である (Vgl. A559=B587)。カントによると「あらゆる自然物の、そしてあらゆるそれの (経験的) 制約の、汎通的偶然性は、必然的な、但し単に仮知的な制約を任意に前提することと全くよく共存し得るであろう。それ故これらの主張の間に何ら真の矛盾は見出されない、したがってこれらの主張は両方とも真であり得る」のである (A562=B590)。カントはこのように、第四の二律背反の定立、反定立とも真たり得る、という形で矛盾を解決しようとしている。私はカントのこのような意向から考えて、カントの第四の二律背反の定立の定式に疑問を懐くのである。この定立は、世界に絶対必然的な存在体が属する、というものであるが、私は単に絶対必然的存在体の実存在を述べる命題が定立であってしかるべきだと思う。世界に属するということを絶対必然的存在体にカントは付け加えてはいけなかったのである。

3. カントの解決の要約

カントによると、純粋理性の二律背反は弁証的推理に基づく。その弁証的推理は「被制約者が与えられているなら、そのあらゆる制約の全系列も与えられている。さて感官の対象は被制約的なものとして我々に与えられている。したがって云々」という推理である (A497=B525)。この推理の大前提は、被制約的なもの所与性の条件の下で無制約者の所与性を告げている。この無制約者の二様の理解に応じて上の弁証的推理により定立命題と反定立命題が得られるという。無制約者の二様の理解とは何であろうか。無制約者は「系列の他の項がそれに従属するがそれ自身は如何なる他の制約の下に立たぬところの系列の部分」であるか、それとも「単に全系列 (その凡ての項は例外なく制約されていてその項の全体のみが端的に無制約的である) のうちに成立する」かであるというのである。後の方の無制約者の概念に問題が存することについては岩崎氏の指摘がある⁽¹⁾。カントは無制約者の概念の二つの種別を余り顧慮していないと思われる。カントが無制約者の概念というとき、系列の第一項としての無制約者の概念を念頭に置く場合が多かった。カントが弁証的推理により定立命題を得た場合、系列の第一項としての無制約者の概念を用いている。カントが「単に全系列……のうちに成立する」無制約者の概念を余り念頭に置いていなかったということは、カントが反定立命題を弁証的推理から得なかったということを意味するのであろうか。私はこれを肯定する。第一及び第二の二律背反の反定立の命題は、定立命題に対して

矛盾的反対 (弁証的反対と区別される) の関係にあるものとしてたてられたのではなかろうか。第三及び第四の反定立の命題は経験の可能性の原理となるものであると私は解する。

数学的二律背反の場合、「被制約者が与えられているなら、そのあらゆる制約の全系列を与えられている」という命題の代りに、「被制約者が与えられているなら、まさにそのことにより被制約者の系列における遡源が我々に課せられている」という命題を大前提とし、感性的被制約者の所与性を告げる命題を小前提とし、推論がなされるならば、そこには正しい推論が成立すると思われる。数学的二律背反の定立と反定立の矛盾は斯くして解消される⁽²⁾。

力学的二律背反の場合、その弁証的推理の大前提を他のものにより置き換えるという方法で解決が図られてはいない。力学的二律背反の場合、感性的被制約者がそれと異種的な仮知的制約を許容するということがある。力学的二律背反の定立命題の場合、先ず弁証的推理により無制約者の現実存在が得られるが、感性的被制約者は異種的な制約を許容することにとどまるということがあるため、力学的二律背反の定立命題は結局無制約者の現実存在をたてることができず無制約者の理念を提出することにとどまるのである。かかる定立命題は真である。力学的二律背反の反定立の命題も真である。したがって力学的二律背反の定立と反定立の間に矛盾は存しないことが明らかになる。カントはこういう形で力学的二律背反にまつわる問題を解決した。

カントは『道徳形而上学の基礎づけ』において「我々はこの理念 [自由の理念] を決して我々自身や人間の本性のうちに現実的に存するものとして証明することはできなかった。我々がみたのはただ、もし或る存在者を理性的であり行為に関して己が原因性を自覚している——つまり意志を賦与されている——と考えようとすればどうしても自由の理念を前提せざるを得ぬということにすぎなかった」と述べているが⁽³⁾、こういうことばかり考えても、カントが「純粋理性の二律背反」の章において、実践的自由の基礎に存する先験的自由が許容され得ることを示したのは大きな意味をもつものといえる。

註

(1) 岩崎武雄「カント『純粋理性批判』の研究」1965年。425ページ。

(2) 岩崎武雄、前掲書。岩崎氏は、数学的二律背反の反定立を真なる命題と看做しているが (432ページ)、

この解釈には従わなかった。この解釈に従う場合、カントが数学的二律背反の定立と反定立とに対して第三の命題を提出したことは如何に解されることになるであろうか。

(3) Kants gesammelte Schriften (Akademie-Ausgabe) IV, S. 448—9.

(4) 魂に関しても神に関しても二律背反が成り立つのではなかろうかという見解があるが(岩崎氏, 前掲書, 433ページ。高橋昭二「カントの弁証論」<哲学研究 490号, 1964年, 761—64ページ), その場合理性の立

場と悟性の立場を対比させる考えがある。私は数学的二律背反と力学的二律背反の区別に注目したい。理性の立場と悟性の立場を対比させて二律背反凡てを解釈することにはとまどいを感じる。私はヤスバースが数学的二律背反と力学的二律背反の区別を重視して二律背反を解釈しているのが注目に値すると思った(Karl Jaspers: Die grossen Philosophen, Erster Band, 1957, S. 453ff.)。

〔了〕